

## 慢性期患者事例を用いた看護過程演習の効果と課題 —複数の患者事例導入の試み—

### Evaluating the effectiveness of and problems related to the nursing training process: a trial involving several chronic-phase patients

佐藤 栄子, 小野 千沙子

#### 要約

複数の慢性期患者事例を用いた看護過程演習を、グループ学習形式で実施し、質問紙調査と学生の提出物の分析から効果を検討した。A大学の看護学科2年生83名を対象とし、74名から回答を得た（回答率89.2%）。演習で学生が学んだことは【疾患に関する知識】、【看護過程の展開方法や看護援助内容】、【慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考え方】、【グループ学習の効果や重要性】、【他のグループ発表を聞くことによる自分とは違う意見があることへの気づき】、【同じ事例のグループ学習結果を比較することによる新たな気づき】等が挙げられた。学生の大部分はグループメンバーと協力できたと回答しており、その内容は【グループでの役割や作業を分担して進めること】、【意見を出して話し合うこと】、【グループ学習の時間に集まること】等だった。演習でわからなかったことや難しかったことは、【疾患や治療の理解】、【看護過程の展開方法】、【患者の個別性の理解】、【グループでの協力】が挙げられた。さらに8割以上の学生が演習は役に立つ、満足と回答していた。しかし教員が設定した目標診断と実際に抽出した看護診断が50%以上合致したのは半数弱のグループだった。演習について学生自身は、学生同士の協力や問題解決能力の向上、看護過程の展開方法や看護方法の理解に効果があると認識していたが、提出物の分析からは課題が多いことが明らかになった。

キーワード：成人看護学 慢性期 看護過程演習 教育評価

#### はじめに

近年、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患などの慢性疾患は、常に死因の上位を占めており、また平成23年に行われた厚生労働省の患者調査<sup>1)</sup>においても、高血圧、糖尿病、脂質異常症、がんなどの疾患で受診している患者が大多数であることを背景に、それらの健康問題を抱えた人たちへの援助である慢性期看護の重要性が高まっている。慢性期看護においては、完治することのない疾患と共に、長期にわたって生活をしていかなければならない患者の経過や特徴を理解し、患者のQOLを最大限に高め、維持していく長期的な援助が望まれる。

慢性期看護教育においては、学生は講義や臨床での実習を通して、慢性疾患やがんの患者が抱える健康問題を理解し、その問題解決に向けて、健康問題の性質を考慮した看護計画を立案し、対象のニーズに合った

看護援助ができるための基本的な能力を養うことが重要である。学生が慢性期の特徴を捉えた看護の理解を促進するための取り組みとしては、グループ学習の形式で、慢性疾患やがんなどの慢性期疾患の患者事例を用いた看護過程演習が行われている<sup>2)-7)</sup>。グループ学習は、学生が講義に比べて意見を述べ、学習活動する機会が多く、学生間の相互の啓発により主体的な学習が期待できること、課題や問題を追及することにより、その解決方法を身につけることが出来ること、学生相互の共同作業を重視することにより協調性を養うことができる<sup>8)</sup>などの効果がある。

加えて、慢性期看護教育における看護過程演習の効果として、情報の解釈の仕方やアセスメント、看護問題の抽出、計画の立案という看護過程の各プロセスの理解度が高まると報告されている<sup>3)-7)</sup>。しかし、先行研究では学生の認知面のみからの評価であるものが多く、学生の提出物やレポートを含めて効果を検討した

ものは少ない<sup>7)</sup>。教育効果の評価としては、学習内容の実態を把握し、学習目標到達の視点から、学生の提出物などを含めて多面的な評価が必要であると考えられる。

また先行研究の看護過程演習では、数事例を教材として用いる形式が多い<sup>2)-7)</sup>。グループ学習は学生の主体的な学習が期待できるなどの利点を考えると、健康問題の質の異なる多くの事例を用いて看護過程演習を行い、その成果を学生同士で共有することが出来れば、より学習効果が高まることが期待できる。

本研究では、複数の慢性期患者事例を用いた看護過程演習を行い、その効果を学生の認識および提出物の内容の側面から評価し、今後の課題を検討することを目的とした。

## 方法

### 1. 研究対象

A 大学医療保健学部看護学科2年生83名を対象とした。

### 2. 慢性期看護過程演習の実際

慢性期看護に関連する教育は、A 大学では看護学科2年生前期に成人看護学概論を学んだのち、後期の成人看護学方法 I（慢性疾患・がん看護）で慢性期看護の概念や具体的な援助方法について学び、さらに3年生の成人看護学実習 I での3週間に亘る病院実習の中で、実際に慢性期疾患の患者を受け持って学習する形になっている。

事例患者を用いた慢性期看護過程演習は成人看護学方法 I（2単位60時間）の科目内で行った。演習の概要を表1に示した。

事例については、学生が慢性疾患やがん患者の多様な健康問題を理解して看護実践に結びつける能力を高められるよう、看護師国家試験出題基準を考慮しながら、代表的な疾患を選択した。筋委縮性側索硬化症、慢性閉塞性肺疾患、脳梗塞、慢性関節リウマチ、卵巣がん、肺がん、乳がん患者の7事例を教員2名で作成し、事例集としてまとめ、学生に配布した。事例患者に妥当と考えられる看護診断中から、学生の抽出目標看護診断として、優先順位の高い診断5～6個を設定した。

表1 看護過程演習の概要

〈学習目標〉		
1. 慢性疾患やがんなどの様々な健康問題をもつ対象者の看護過程の展開方法と問題に応じた看護方法を理解できる		
2. グループ学習を通して、学生同士が協力しながら、問題解決能力を向上することができる		
〈演習内容〉		
各グループで1事例の患者の「病態関連図」「事例患者の関連図」「看護計画」を作成する		
〈事例〉		
筋委縮性側索硬化症、慢性閉塞性肺疾患、脳梗塞、慢性関節リウマチ、卵巣がん、肺がん、乳がん患者の7事例		
〈グループ編成〉		
1グループ5～6名の15グループ編成とする		
〈演習の進め方〉		
回数	内容	備考
1回目(90分)	演習オリエンテーション、病態関連図の作成	・学生には病名のみを伝えて、病態関連図を作成
2回目(90分)	病態関連図の作成	
3回目(90分)	事例患者の関連図作成	・教員が病態関連図完成を確認後、グループごとにすべての患者情報を記載した事例集を配布
4回目(90分)	看護問題の抽出、看護計画立案	
5回目(90分)	看護計画立案、発表準備	
6・7回目(90分×2)	1～8グループの演習成果発表会	・発表会は学生主体で運営 ・各グループの作成した「事例患者の関連図」と「看護計画」を発表資料として配布
8・9回目(90分×2)	9～15グループの演習成果発表会	・発表時間は1グループあたり発表15分、質疑応答5分、合計20分 ・ひとつのグループ発表後に質疑応答の時間を設定 ・同じ事例患者の発表終了後、教員が評価コメントをする

演習の進め方は、オリエンテーションを行ったのち、まず学生へ病名のみを伝えて関連図を作成させ、次に事例患者情報を提供して関連図作成、看護問題の抽出、看護計画立案の手順で進め、グループで作成した関連図、看護計画の提出を求めた。さらにグループ演習成果の発表会は、グループで作成した関連図と看護計画を学生全員に配布し、資料として用いて行った。発表会は学生主体で運営し、同じ事例患者の発表が終わった後、質疑応答の時間を設け、最後に教員が評価コメントをする形式とした。これらは60時間の講義のうち、後半の18時間を用いて実施した。演習時間は先行研究<sup>2), 3), 5)</sup>を参考に設定した。学生グループは2年生の秋に行われる基礎実習Ⅱの編成を転用して1グループ5～6名の15グループ構成とし、教員2名で分担して指導を担当した。1事例に対して数グループが取り組むよう、割り振った。

### 3. 調査方法

看護過程演習終了時に、教員から本研究の趣旨と方法、倫理的配慮について、文書を用いて説明を行って協力を依頼し、調査票を配布した。説明内容は、調査票は無記名であり、データはID番号で処理すること、研究成果を公表する際には個人が特定されないことがないこと、さらに研究への協力は自由であり、協力の有無が成績には影響しないことなどであった。調査票は、その場に用意した回収箱、もしくは看護学科建物内のレポート提出ボックスで回収した。調査時期は平成25年2月だった。

### 4. 調査内容

まず慢性期看護過程演習を通して学んだことについては自由記述で尋ねた。グループメンバーとの協力については「非常によく協力できた」「まあまあ協力できた」「どちらとも言えない」「あまり協力できなかった」「まったく協力できなかった」の5件法で尋ね、グループメンバーとの協力内容について尋ねた。

次に看護過程演習でわからなかったことや難しかったことは自由記述で尋ねた。看護過程演習の有用性は「非常に役に立つ」「まあまあ役に立つ」「どちらとも言えない」「あまり役に立たない」「まったく役に立たない」、看護過程演習の満足度は「非常に満足」「まあまあ満足」「どちらとも言えない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」の5件法で尋ねた。演習に対する改善意見については自由記述で尋ねた。

さらに学生が発表資料として提出した関連図、看護

計画から、学生がどのような看護診断を抽出しているか、グループ別に調べた。

### 5. 分析方法

自由記載部分については、慢性期看護過程演習を通して学んだこと、グループメンバーとの協力内容、演習でわからなかったことや理解できなかったこと、に相当する記載を意味単位として抽出し、意味内容の類似性、相違性からカテゴリを作成した。演習に対する改善意見や記載された演習の感想についても同様にまとめた。グループメンバーとの協力、看護過程演習の有用性、看護過程演習の満足度については記述統計を算出した。看護問題の抽出については、学生の抽出した看護診断数の記述統計を示し、各グループが挙げた看護診断が、事前に教員が設定した看護診断に合致した割合を算出した。分析は2名の教員で行い、合意を得た。

### 6. 倫理的配慮

本研究は、桐生大学・桐生大学短期大学部倫理委員会により承認を得て実施した（受付番号2409）。

## 結果

応諾状況は、調査票を配布した83名のうち、74名から回収し、回収率は89.2%だった。

表2に看護過程演習を通して学生が学んだことを示した。実際のデータを‘ ’、作成したカテゴリを【】で示す。カテゴリとして、【疾患に関する知識】、【看護過程の展開方法や看護援助内容】、【慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考え方】、【グループ学習の効果や重要性】、【他のグループ発表を聞くことによる自分とは違う意見があることへの気づき】、【同じ事例のグループ学習結果を比較することによる新たな気づき】、【発表の仕方】が挙げられた。【疾患に関する知識】では‘事例を用いることで疾患の知識がより深まった’や‘具体的な慢性疾患やがんの患者の症状を理解できた’のように、事例患者を通じた疾患の病態や症状の理解が表されていた。【看護過程の展開方法や看護援助内容】では、具体的な関連図の作成や看護診断の優先順位のつけ方や看護計画立案といった看護過程の一部分に関する記載だけでなく、‘診断名、目標、計画に一貫性がないと変’など、看護過程の展開方法のプロセスについての記述も見られた。また自分自身が取り組んだ事例だけではなく、グループ発表を聞くことにより‘他のグループの事例の看護過程’

表2 看護過程演習を通して学生が学んだこと

n=74

カテゴリー名(記載数*)	回答例
疾患に関する知識(21)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事例を用いることで疾患の知識がより深まった</li> <li>・関節リウマチについて勉強してわかるようになった(病態・症状)</li> <li>・他のグループの疾患について</li> <li>・具体的な慢性疾患やがんの患者の症状を理解できた</li> </ul>
看護過程の展開方法や看護援助内容(28)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関連図を病態関連図から広げていくやり方を教わって、関連図を描くのが少し出来るようになった</li> <li>・優先順位のつけ方が様々でどのようにつけると良いかわかった</li> <li>・薬の影響による心身の変化をどのように受けとめ、どのようなケアを行うか勉強になった</li> <li>・患者の援助、精神的苦痛、不安への緩和方法</li> <li>・診断名、目標、計画に一貫性がないと変である。特に診断名につながる関連因子、重要である</li> <li>・どのように疾患を理解して計画していけばよいか理解できた</li> <li>・自分が学習した疾患だけでなく、他のグループの疾患の看護問題や看護計画がわかり、よかったと考える</li> <li>・自分が受け持った事例だけでなく、他のグループの事例の看護過程も学べ、自分がわからなかったところも理解できた</li> </ul>
慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考え方(11)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・がんの疾患を患った患者には身体的苦痛の他に精神的苦痛もあるということが勉強になった</li> <li>・直接病気を治すことはできないことが多いけれど、その患者にとって良い方向にもっていける、また悪くしないケアが大切だと思った</li> </ul>
グループ学習の効果や重要性(21)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えがまとまっていなかった時など助け合うことができた</li> <li>・グループで行うことにより自分の分からない所も勉強できるので良かった</li> <li>・普段、関わることのない人とも関わることで、チームワークや自分とは異なる考え方などを学べた</li> <li>・グループでやることによって、自分が気付かなかったことや理解できなかったことが分かった</li> </ul>
他のグループ発表を聞くことによる自分とは違う考えがあることへの気づき(22)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分とは違う看護の視点や援助の内容や方法を学ぶことができ、おもしろかった</li> <li>・関連図や計画が全部同じものがなく、自分だったらこうつなげる、考えるということもあれば、なるほど、確かにと思えるところもあり、参考になった。例えば診断名は同じなのに、関連因子が違った場合</li> <li>・自分たちの調べた内容と違った内容の発表を聞いて、こういう考え方もあるんだなと思えた</li> <li>・自分が思いもしなかった視点があったことに気がついた</li> </ul>
同じ事例のグループ学習結果を比較することによる新たな気づき(23)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ疾患でもグループによって関連図や看護計画が違ったため、「そういうものもあった」と気がつくことができた</li> <li>・看護問題に挙げた事が一緒だったところもあったし、違うところもあったところ。気づかなかったことが他のグループの発表で気づけたし、同じことは自信につながった</li> <li>・事例がいくつかあり、同じ事例の他の班の発表はためになったと思う。他の視点で見ることに気づけた</li> <li>・自分達と同じ事例の班の発表は自分達が気付かなかったことや足りなかった部分を知れました</li> </ul>
発表方法(1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表の仕方</li> </ul>

\*複数回答

についての記載も見られた。さらに【慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考え方】では‘直接病気を治すことはできないことが多いけれど、その患者にとって良い方向にもっていける、悪くしないケアが大切’などと表されていた。グループ学習では‘助け合う’、‘自分のわからないことも勉強できる’などいう【グループ学習の効果や重要性】が述べられていた。グループ学習成果の発表会では、‘自分とは違う看護の視点や援助の内容や方法を学ぶことができた’り、‘関連図や計画がぜんぶ同じものがなく、(中略)参考になった。例えば診断名は同じなのに、関連因子が

違った場合’という【他のグループ発表を聞くことによる自分とは違う意見があることへの気づき】、さらに‘自分達と同じ事例の班の発表は自分達が気づかなかったことや足りなかった部分を知れました’などの【同じ事例のグループ学習結果を比較することによる新たな気づき】が挙げられた。【発表の仕方】に関する記述もあった。

図1にグループメンバーとの協力の実施程度を示した。「非常によく協力できた」者が36.4%、「まあまあ協力できた」者が半数であった。表3にグループメンバーとの協力内容を、協力できた内容とできなかった



内容に分けて示した。共通して挙げられたカテゴリーは、【グループでの役割や作業を分担して進めること】、【意見を出して話し合うこと】、【グループ学習の時間に集まること】であり、多くは協力できた内容に関する記載であった。【関連図や看護過程の作成】作業を協力して行えたことも述べられていた。

表4に看護過程演習でわからなかったことや難しかったことを示した。カテゴリーとして、【疾患や治療の理解】、【看護過程の展開方法】、【患者の個別性の理解】、【グループでの協力】、【演習スケジュールの理解】が挙げられた。【疾患や治療の理解】では‘薬の名前や検査を調べるのに苦労’した、‘参考文献が少なく資料が得られない’などの記述があったが、一番記

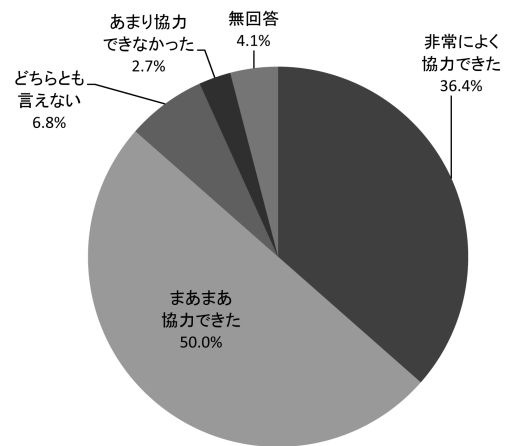


図1 グループメンバーとの協力 (n = 74)

表3 グループメンバーとの協力内容

カテゴリー名	協力できた		協力できなかった	
	回答例	記載数*	回答例	記載数*
グループでの役割や作業を分担して進めること	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループで分からない言葉を調べたりなど、やることを分担して協力して行えた</li> <li>分担して行うことで、より多く計画を立てることができた</li> <li>役割分担をして進んできたこと</li> <li>班のリーダーだったため進行など積極的に行った</li> <li>みんなで発表できた</li> </ul>	28	<ul style="list-style-type: none"> <li>人任せにしてしまう事が多々あった</li> <li>みんなでどうすると言い合うだけで、あまり効率的に活動できなかった</li> </ul>	4
意見を出して話し合うこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>みんなで話し合ったり、色々な意見を言えた</li> <li>意見をかわし合って1つのものを協力してできた</li> <li>関連図作成時、グループで話し合い、案が出ることも多々あって、スムーズに進めることができた</li> </ul>	19	<ul style="list-style-type: none"> <li>意見出せない</li> </ul>	2
グループ学習の時間に集まること	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループに協力し、集まる時は必ず出席できた</li> <li>授業時間外に集まって関連図や計画の内容を深く追求することができた</li> </ul>	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>班の人があまり集まらなかった</li> <li>集まりがあった時に(他の科目の)課題があって行けないときがあった</li> </ul>	4
関連図や看護過程の作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>疾患の病態や関連図</li> <li>看護計画を立てることに協力できた</li> </ul>	7	該当なし	0

\*複数回答

表4 看護過程演習でわからなかったことや難しかったこと

カテゴリー名(記載数*)	回答例
疾患や治療の理解(6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>疾患をよく理解すること</li> <li>聞いた事のない薬の名前や検査を調べるのに苦労した</li> <li>事例が卵巣がんで、参考文献が少なく資料があまり得られなかったこと</li> <li>患者の関連図の書き方について、もっと具体的説明がほしかった</li> </ul>
看護過程の展開方法(20)	<ul style="list-style-type: none"> <li>(関連図で)関連をうまく説明できない</li> <li>カルペニートを使って看護診断をするのは難しかった。自分が挙げたいと思っているに、なかなか探せなかった</li> <li>関連図や計画を書くことにイマイチ慣れていなかったため、具体的に書くのがむずかかった</li> <li>慢性期なので、その病気が治ることは難しいことをどう考えて患者の看護に含めればよいのか、よく分からなかった</li> <li>慢性疾患ということで退院後のことまで考えて看護過程をしなければいけないことが難しかった</li> </ul>
患者の個別性の理解(3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>その人に合った看護、疾患や年齢を考えれば考えるほど難しい</li> </ul>
グループでの協力(3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループ内での役割分担</li> </ul>
演習スケジュールの理解(1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>事例は1つしか時間をかけていないのに発表になったら他のグループの事例ができて驚きました。よく分かりませんでした</li> </ul>

\*複数回答

載が多かったのは、【看護過程の展開方法】であり、関連図の書き方やカルペニートの看護診断<sup>9)</sup>を用いて看護問題を表現することの難しさ、長期的な視点で援助を考えることの難しさなどが述べられていた。

図2に看護過程演習の有用性に関する学生の認識を示した。「非常に役に立つ」は32.4%、「まあまあ役に立つ」が60.8%であり、「どちらとも言えない」が5.4%だった。

図3に看護過程演習の満足度を示した。「非常に満足」は16.2%、「まあまあ満足」が68.9%、「どちらとも言えない」が13.5%だった。

表5に看護過程演習に対する改善意見を示した。教員の関わりの不足や演習時間不足、事例のレベルの差

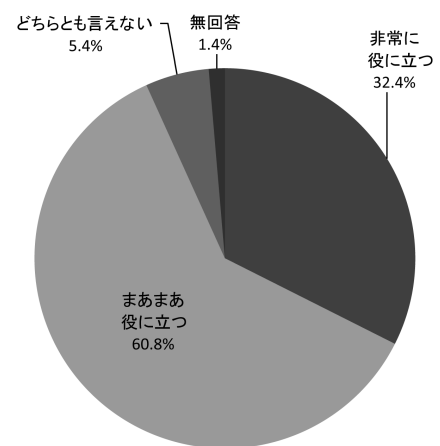


図2 看護過程演習の有用性 (n = 74)

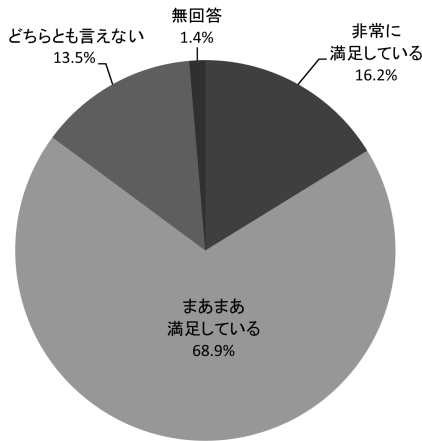


図3 看護過程演習の満足度 (n=74)

や情報量の少なさ、他の科目の演習との疾患重複を指摘する意見があった。演習成果の発表については、事前の発表資料配布の希望や、能動的な態度で発表を聞けるような工夫を促す意見、教員の評価コメントを聞いて修正した内容を、再度、指導してほしいなどの意見が述べられていた。

表6に看護過程演習の感想を示した。教員の関わりやグループワークに関する肯定的な意見が表されていた。演習の効果については、効果があるという意見があった反面、‘あまりわからなかった’、‘自分で実際に行った事例は深く理解できるが、その他の事例は学びが浅い’という意見が述べられていた。

各グループの看護診断数は平均4.6±1.1個（範囲2-

表5 看護過程演習に対する改善意見（抜粋）

	回答例
教員の関わりについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護過程を展開する上でそれぞれの疾患のコアとなる部分や注目すべき部分(症状・治療・副作用)についてグループワークの際にヒントを与えて欲しかった</li> <li>看護過程展開のやり方を少しでも説明して欲しかった</li> </ul>
演習方法について	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間が少なく予想よりも病態生理、関連図が理解に欠けた</li> <li>事例のレベルの差が著しかった。難しい上に、情報量も少なく困った</li> <li>事例で記載されていても情報が少ない箇所があったので、問題に結びつけて良いかわからなかった</li> <li>他の授業で同じ疾患をずっとやっていると、できれば他の教科の先生と話してもらって違う疾患もやりたかった</li> </ul>
演習成果の発表について	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表といっても、ほとんど各グループのプリントを読みあげているだけだったので、事前に資料の配布をすると、もっと質問できたり、より深く学べるのでは？と思いました</li> <li>発表の時に、ただ聞いているだけだったので、班の発表を聞いて感想と書くといいと思いました</li> <li>演習をすることで、慢性疾患やがんについて考えることができたが、最後発表したが、先生が改善した方が良い点を言ってくれたが、そこを直して、先生に見てもらおうことができなかったので、正解が分からなかった。だから発表を最後の授業日にするのはよくないと思った</li> </ul>
グループワークについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループ内で役割に偏りが出してしまうので、全員が参加できるように、個人でも用紙を提出するなどした方が良いと思った</li> </ul>

表6 看護過程演習の感想（抜粋）

	回答例
教員の関わりについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループごとにコメントをもらえるのがよかった。改善点が明確になった</li> <li>先生が丁寧に教えてくれてやりやすかったです</li> </ul>
演習方法について	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が発表することで分かりやすく質問しやすい雰囲気だった</li> <li>事例の内容が簡潔に示されていてよかったです</li> </ul>
グループワークについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>GWはみんなの意見が聞けるので、とてもよい学習となりました</li> <li>グループでやることで協力し合えたので良かった</li> </ul>
演習の効果について	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの疾患について学習できたのでよかった</li> <li>今後の実習などに役に立てることができる演習だったと思います</li> <li>色々な質問にも答えられるくらい疾患を理解できていてすごい、見習いたい</li> <li>あまり分からなかった</li> <li>自分で実際に行った事例は深く理解できるが、その他の事例は学びが浅い</li> </ul>

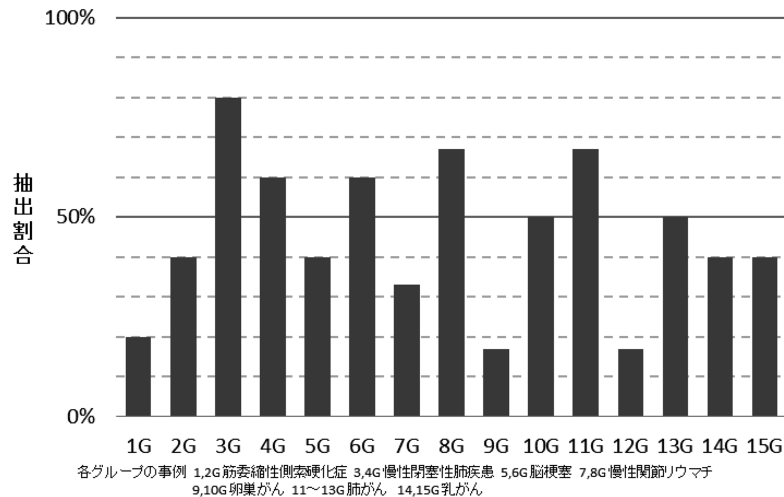


図4 各グループ別の看護診断抽出割合

7) だった。学生の抽出した看護診断は、演習で使用したカルペニートの看護診断ブック<sup>9)</sup>に沿っていない表現での記述や表記の誤りと思われるものが複数見られたため、学生の挙げた各看護診断の妥当性について、教員2名で学生の全ての提出物を検討して判断した。各グループの妥当な看護診断の平均は、 $2.5 \pm 1.1$  だった。図4には、各グループが挙げた看護診断が、教員が設定した看護診断に合致した割合を示した。50%以上合致したのは、15グループ中7グループだった。慢性閉塞性肺疾患の事例に取り組んだ2グループと、肺癌の事例に取り組んだ3グループ中2グループが50%以上合致していたのに対し、筋委縮性側索硬化症、乳がんに取り組んだすべてのグループは50%に達しなかった。

## 考 察

本研究で行った複数の慢性期患者事例を用いた看護過程演習の効果と今後の課題について、①慢性疾患やがんなどの様々な健康問題をもつ対象者の看護過程の展開方法と問題に応じた看護方法を理解できる、②グループ学習を通して、学生同士が協力しながら、問題解決能力を向上することができる、の演習目標の視点から考察する。

### 1. 看護過程の展開方法と問題に応じた看護方法の理解

学生が学んだこととして、【看護過程の展開方法や看護援助の内容】の категория が挙がり、学生の記載数が最も多かった。内容も関連図の作成から看護問題抽出、看護診断の立案と、今回の実習で実施した各プロセスをほぼ網羅していた。また他のグループの発表

事例の看護過程についても、学んだこととして挙げられていた。さらに【慢性疾患やがんの患者の特徴や看護援助の考え方】では、‘直接病気を治すことはできないことが多いけれど、その患者にとって良い方向にもっていき、悪くしないケアが大切’など、学生は学習した内容を抽象化して表わしていた。このような学びはひとつの事例に対するグループ学習からでは学習が難しい内容と考えられ、全グループが提出した関連図と看護計画をグループ演習成果の発表会の資料として配布し、他の事例に取り組んだグループの発表を聞くことなどから得られた効果だと考えられる。さらに【他のグループ発表を聞くことによる自分とは違う意見があることへの気づき】や【同記事例のグループ学習結果を比較することによる新たな気づき】でも、自分が取り組んでいない事例や自分が取り組んだものと同じ事例の発表を聞くことにより、自分とは違う視点での考え方があることに気づいており、学生の思考の幅の広がりにつながる効果が得られているのだろう。ひとつのグループあたり20分という限られた発表時間の中で、このような学びを得たことには、演習時に各患者事例を事例集としてまとめて配布していたことに加えて、学生らが提出した関連図と看護計画を発表資料として配布したこと、学生からの質疑応答の時間を設定したこと、同記事例の発表終了後に教員が評価コメントをしたことなどが効果につながったと推測する。今後、発表資料を事前に配布し、あらかじめ学生が目を通せる時間を確保すれば、より理解を深められる可能性も考えられる。

以上より、今回、我々が実施した複数の患者事例を用いた看護過程演習は、様々な健康問題を持つ患者の

看護過程や看護方法の学習に一定の効果があることが示唆された。

しかしながら、看護過程演習でわからなかったことや難しかったことで、記載数が多かったものは【看護過程の展開方法】だった。関連図を用いて看護問題を抽出する、カルペニートの看護診断<sup>9)</sup>を用いて看護問題を表現する、看護計画を具体的に書くなどの基本的な看護過程の展開に関する記載が少なからず見られたことや、改善意見の中で教員に看護過程の展開方法の説明を求める意見があったことから、一部の学生が既習内容を十分に理解できていない現状が推察された。

さらに看護問題抽出に関しては、教員が設定した診断に合致した割合が50%以上だったのは、わずか15グループ中7グループのみで、診断名の表記ミスが目立った。教員が設定した看護診断は、3年生前期から開始される成人看護学実習Ⅰで、概ね教員が指導目標とするレベルであり、2年生後期の段階においても十分に看護診断ができない学生が多い現状が推察され、今後、当該科目の講義内での対策が必要と考えられた。

## 2. グループ学習を通しての学生同士の協力と問題解決能力の向上

グループメンバーとの協力については、「非常によく協力できた」「まあまあ協力できた」と回答した学生が8割を超えており、概ね、学生同士の協力が出来ていたと思われた。

グループとの協力内容からも【グループでの役割や作業を分担して進めること】、【意見を出して話し合うこと】、【グループ学習の時間に集まること】が挙げられ、学生らが意見を述べて主体的に学習したり、共同作業の中から協調性を養ったりしていることが推察された。本研究では、学生の人間関係構築に関する負担を軽減する観点から、基礎実習のグループを転用しており、それにより限られた演習時間内でも、グループ内で協力して演習を進められた可能性がある。

しかし記載数は少ないものの、‘人まかせにしてしまう’、‘意見が出せない’、‘班の人があまり集まらない’という学生がおり、今後はグループ学習が円滑に進行するよう細やかな指導が必要と考えられた。本研究では演習時の指導に際して、教員は学生らが協力して演習を進められるよう、演習時は必ず全員の学生に声をかける、肯定的な表現でアドバイスするなど、各自が工夫して指導していたが、今後は指導案の充実に向けて検討を行っていく必要があるだろう。

## 3. 看護過程演習の有用性と満足度

看護過程演習の有用性については「非常に役に立つ」「まあまあ役に立つ」と回答した者が9割を、看護過程の満足度では「非常に満足」「まあまあ満足」が8割を超えるという結果であり、大部分の学生は看護過程演習を有用、満足と評価していると考えられた。しかし「非常に」と答えている学生は「まあまあ」と答えている学生よりも少なく、学生からの改善意見なども参考に、演習方法の修正が必要であろう。

## 4. 今後の課題

本研究の結果より、慢性期患者事例を用いた看護過程演習では、グループ学習を通して学生同士の協力と問題解決能力の向上面で効果があることがわかった。しかし、看護過程の展開方法や問題に応じた看護方法の理解については、一定の効果はあるものの、看護診断抽出の点からは課題が残ることが明らかになった。学生は看護過程のアセスメントに困難を感じているという報告<sup>4) 5)</sup>もあり、今後、学生が妥当な問題抽出ができない原因については、関連図などの提出物の分析などを通して検討し、対策を講じることが急務と考えられる。

演習方法については、‘事例のレベルの差がある’、‘聞いたことのない薬の名前や検査を調べるのに苦労した’という記載があり、教員が設定した看護診断と学生が抽出したものと合致した割合にばらつきが見られたことから、事例の難易度を再検討し、修正を加える必要があるだろう。

今回の演習では、実習で受け持つ機会の少ない疾患を意識的に学習する意図で、事前の講義で十分に教授できているとは言えない内容も含まれていた。事例の内容によっては、学習課題が複雑すぎると短期間での学習では事例の理解にとどまってしまうことも考えられる。また‘卵巣がんの参考文献が少なく資料があまり得られなかった’など、より学生が主体的に学習できるような学習環境の整備も重要である。

加えて、慢性期患者事例を用いた看護過程演習での学習内容の効果については、縦断的な視点でも検討していく必要があると考える。

## 引用文献

- 1) <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/10-20.html>
- 2) 石川りみ子, 上間直子ら: 成人保健看護における看護過程演習の臨床実習への学習効果. 沖縄県立



- 看護大学紀要, (3) : 85-93, 2002.
- 3) 石塚敏子 : 看護過程のアセスメント段階における学生の理解度を高める教授法の検討. 新潟医療福祉学会誌, 7(1) : 10-19, 2007.
  - 4) 岩月すみ江, 武分祥子ら : 看護過程演習における評価と課題—成人看護学実習前演習の振り返り用紙の分析—. 飯田女子短期大学紀要, 25 : 179-190, 2008.
  - 5) 柴田和恵, 前田明子ら : 成人看護学看護過程演習の評価. 天使大学紀要, 11 : 29-37, 2011.
  - 6) 関美奈子 : 臨地実習直前の成人看護学カリキュラムの検討. 日本看護科学会誌, 23(4) : 61-70, 2004.
  - 7) 豊島由樹子, 澤田和美ら : 紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価 (第1報) —看護過程演習前後における学生の自己評価—. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, (11) : 127-138, 2003.
  - 8) 佐藤みつ子 : 看護教育における教授 - 学習方法. 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子ら. 看護教育における授業設計. 医学書院 (東京), 156-162, 2009.
  - 9) Lynda J. Carpenito-Moyet. : 看護診断ハンドブック. 医学書院 (東京), 第9版, 2012.

## Evaluating the effectiveness of and problems related to the nursing training process: a trial involving several chronic-phase patients

Eiko Sato, Chisako Ono

### Abstract

A nursing training process was conducted in a group-learning format using several chronic-phase patients as examples. The effectiveness of the training was examined on the basis of an analysis of materials submitted by students and a questionnaire. A total of 74 out of 83 second year nursing students of A university responded (response rate, 89.2% ). The training taught students “knowledge about diseases,” “methods of developing nursing processes and nursing support,” “characteristics of patients with chronic disease or cancer and approaches to nursing support,” “effectiveness and importance of group learning,” “awareness of different opinions that can be judged by listening to presentations by other groups,” and “new realizations can be achieved by comparing the outcomes of group learning about the same case.” The majority of students responded that they could cooperate with group members, including “progressing by accepting one’s role within the group and sharing responsibilities,” “voicing and discussing opinions,” and “finding time for group-learning sessions.” Difficulties and confusions during the training included “understanding diseases and their treatments,” “developing nursing processes,” “understanding patient individuality,” and “group cooperation.” Furthermore, more than 80% students responded that the training was useful and that they were satisfied. However, more than 50% of the nursing diagnoses made by the students were consistent with the nursing diagnoses made by the teaching staff for <50% students. The students themselves found that the training improved cooperation with their peers and their problem-solving abilities. The students also noted an effect on their understanding of the nursing process development and nursing methods. However, many problems were identified from the analysis of the submitted material.

Keywords: adult nursing, chronic phase, nursing training process, educational evaluation